

新 アジアの風

県立大地域経済研究所報告

昨秋、カンボジアのプノンペンでイオンモールを訪れた。2014年6月にカンボジアの1号店としてオープンしたこの店は、イオンによると、1年間で来店者が1500万人に達したという。これはカンボジアの人口とほぼ同じ数であり、同国の消費意欲や購買力の高まりを示している。イオンは2号店を18年夏に開店予定であると発表した。消費の拡大が続くと見込

松尾 修二准教授

活発な消費を支えるのは所得の向上だ。ただ労働者にとつての所得の向上は、企業を経営する立場からは支給する賃金の上昇を意味する。実際、在プノンペンの日系縫製企業2社を訪問した際、両社とも「賃金上昇が急すぎる」と

賃金急上昇のカンボジア

んでの判断であろう。

朝夕にプノンペン市内を自動車で移動した際には、ひどい渋滞に巻き込まれた。バイクや自動車が道路にあふれんばかりであった。カンボジア在住の方も「渋滞がひどくなり、自動車が出掛けるときは所要時間が読めなくなってきた」とこぼす。幹線道路沿いには日本や韓国、米国、欧州メーカーの自動車販売店とおぼしき建物をいくつも見かけた。バイクや自動車を買える所得水準に達している市民が増えているようである。

進出企業 割安感薄れ



①多くのバイク、自動車で道路が混雑する朝のプノンペン市内②大勢の買い物客でにぎわうイオンモールのフードコート (ともに筆者撮影)

口をそろえた。カンボジアの縫製業・製靴業の法定最低賃金(月額以下)は、12年の61ドルが15年には128ドルへと、3年で2倍以上に増えたのである。ことし1月には140ドルへと、さらに引き上げられた。こうした急速な賃金上昇への対応は、カンボジア進出企業にと

って大きな問題となっている。隣国のタイやベトナムに比べれば、カンボジアの賃金はまだまだ安価な水準だ。しかし、その差は縮まっている。タイの法定最低賃金は、12年の136ドルから15年は182ドル(全国一律)、ベトナムは、ハノイやホーチミンなどでは12年の95ドルが15年には146ドルへと、それぞれ上昇した。カンボジアの最低賃金の水準は、12年はタイの45%、ベトナムの64%であったのが、15年にはそれぞれ70%、88%と上がった。タイやベトナムに対するカンボジアの賃金の割安感が薄れつつある。消費の活発化と賃金の上昇。経済が成長するところには、おのずとみられる現象だが、カンボジアでは変化のスピードが速い。カンボジアでの事業環境を見るときには、こうした変化の速さを考慮に入れることが必要になっている。